

国際秩序の変化と北朝鮮 を取り巻く新たな環境

三村光弘

(新潟県立大学北東アジア研究所)

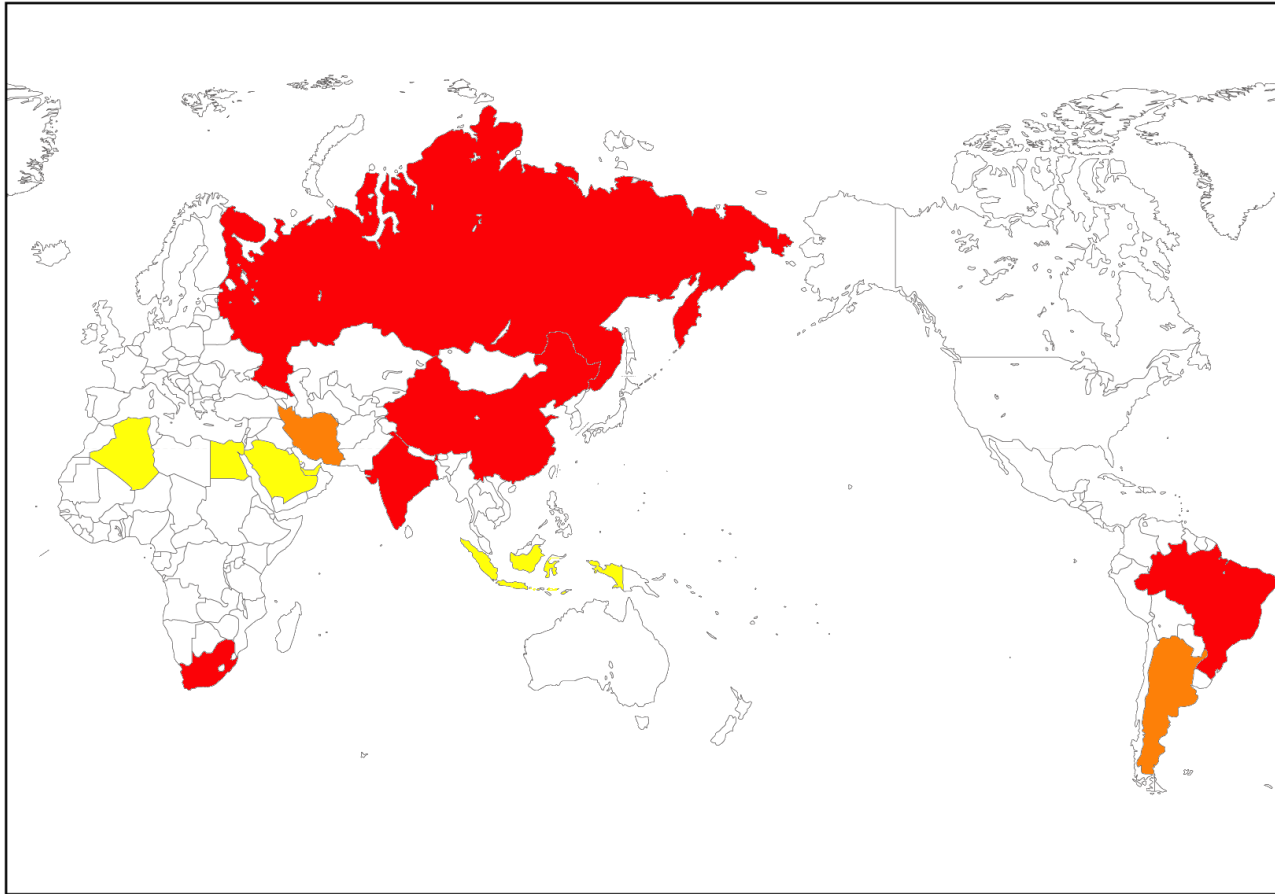
既存の世界秩序の「ゆらぎ」と「グローバルサウス」の存在感

- ロシアのウクライナ侵攻を受けた米英欧の経済制裁への対応
 - G7諸国（日本含む）→積極的に同調
 - 韓国・シンガポール→消極的に同調
 - 多くのASEAN諸国、インド、南アフリカ、ブラジル等→制裁に参加せず
- 先進国とは違った対応を見せる国々が増加する趨勢
 - G7諸国が世界の経済や人口に占める割合は低下の一途
 - 過去の植民地支配や介入の経験からの米英欧に対する否定的な感情が可視化される傾向

「グローバルサウス」を主軸とする 「もう一つの」世界秩序形成

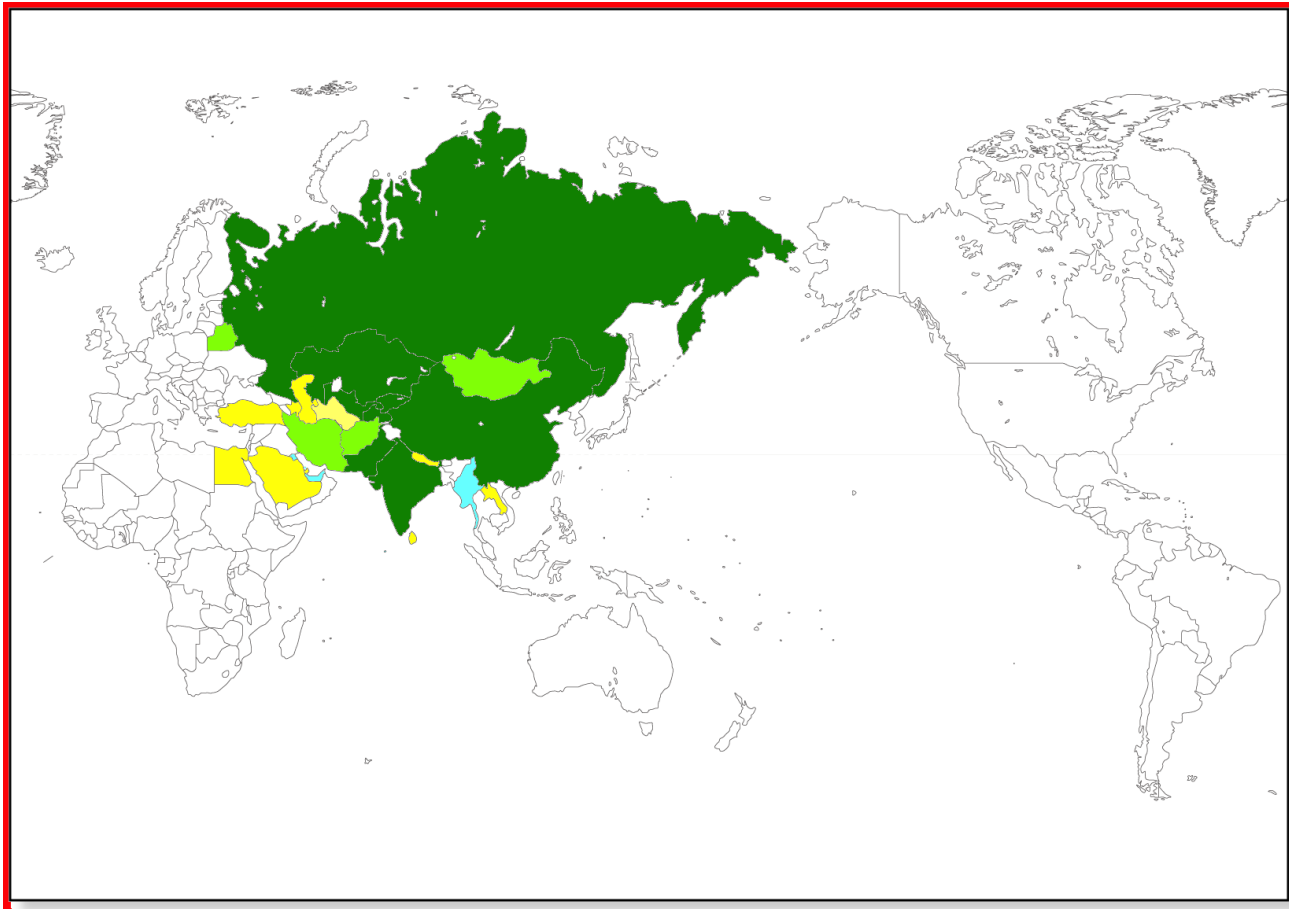
- BRICSや上海協力機構（SCO）への参加希望国の増加
 - BRICSに公開的に参加を希望する国と非公開ながら参加を希望する国
 - 様々な参加のレベルがある「緩い共同体」の上海協力機構
- 2022年インドネシア、23年インドが議長国のG20と23年日本が議長国のG7の違い
 - G20はウクライナにおける紛争当事者を両方招聘
 - G7はウクライナにおける紛争当事者の一方に肩入れ

BRICS拡大の傾向



(出所) 各種報道から発表者作成

上海協力機構 (SCO) 拡大の傾向



(出所) 各種報道から発表者作成

既存国際秩序の変化の可能性

- G7中心の国際秩序は、当分の間は制度として残る可能性が高い。
 - 国際秩序を維持する米英欧の能力が落ちるにしたがって、既存の国際秩序はゆっくりと変質する方向に向かう可能性が高い
 - BRICS、SCOの性格や既存の国連安保理の常任理事会制度から鑑みるに、各地域の大国が当該地域の国際秩序に責任を持つ体制へと移行していく可能性が高い。
- ユーラシアにおいては、中国とロシアが、南アジアにおいてはインドが核心となるか。

ユーラシアとアジア（インド）太平洋における変化

- 中国とインドの和解ないしは対立の緩和
 - 両大国に挟まれるASEAN諸国の動向
- 中国とロシアの関係強化
 - 両国に隣接する日本、韓国、北朝鮮、モンゴルの動向
- 中国の地域大国化公認と国共内戦の趨向
 - 台湾危機ないしは戦争なのか、それとも第3次国共合作（1981年9月、葉剣英が提案）のバージョンアップなのか
 - 次期総統選挙で判明する台湾人民の民意
- 朝鮮半島に対する中口の影響力強化
 - 北朝鮮の不安感がどの程度解消され、経済成長や非核化に取り組む余裕が出てくるか。
 - 日本と韓国はこの変化にどのように対応していくか。

朝鮮半島における変化（1）

- 制裁と北朝鮮

- 国連安保理決議による国際的制裁は当分の間維持される可能性が高い→中口も核不拡散条約（NPT）上の核兵器国の地位が脅かされることを望まない
- 国際的制裁以上の米国（韓国、日本、EU）による単独制裁は、米国の制裁実行力が低下し、二次的制裁が難しくなれば実質上緩和される。

- 北朝鮮の対外経済関係

- 中国やASEAN、インド、その他のBRICSやSCOメンバーの国々との対外経済関係は結びやすくなるか。
- 北朝鮮がこれらの国々と正常な投資や貿易関係を結ぶことができる条件（市場化、法、制度）を設定できるか。

朝鮮半島における変化

- 北朝鮮の核武装の原因となる事象がどのように変化するか
 - 米朝関係の変化→新たな米朝関係を米国が築くつもりになるか（非核化が先か、関係改善が先か）
 - 南北関係の変化→南北が南の政権交代にかかわらず、一定の安定した関係を築けるか。
- 北朝鮮の自国の体制に対する自信がどうなるか
 - 経済成長の過程で起こりうる、様々な失敗を乗り越えられる自信を持てるか。
 - 北朝鮮が経済成長し、中所得国になった際に、国民の不満が爆発し、体制が瓦解することを防ぐことができるという自信を持てるか。

ご清聴ありがとうございました。

mimura@unii.ac.jp